

「旅の絵」にみる若きハイネ像

小野寺直樹

H. ハイネはほぼ 19 世紀前半の詩人である。この 19 世紀前半と云うのは、世界史的に見れば、前世紀末のフランス大革命に引続くナポレオン時代、英国の産業革命、そしていわゆるドイツ古典哲学の完成等による近代国家の成立への、動揺と苦悩に充ちた一つの過渡的な時代である、と云えば少しおおざっぱに過ぎるだろうか。とにかく他国はさておくにしても、ドイツにおいては 19 世紀初頭に、長年続いた《神聖ローマ帝国》が解体し、以後この世紀前半は、数多の領邦が割拠することになり、従ってドイツの近代化は遅れ、やっと 1871 年になって、しかもビスマルクのお膳立による上からの統一ドイツ帝国の成立となる。

1813 年から 15 年にかけての、いわゆるドイツ解放戦争によってナポレオンを追い出した後に出現したのは、ドイツの民衆の願いとは裏腹の《神聖同盟》であり、メッテルニヒによって、これが大反動体制の支柱となるに及んで、ドイツの民衆の声は圧殺され、近代化への一切の自由主義運動や革命運動は弾圧され続けた。

文学の面ではどうだったか。1805 年には F. シラーが歿し、ゲーテも 1832 年にその長い生涯を閉じ、そして前世紀末に端を発し、古典主義に相対する形でドイツ文学の主潮をなしたロマン主義も、政治的・社会的に反動化して行く中において、全く衰退してその存在意義を失ってしまい、時代は新しい文学の勃興を求めた。1830 年のパリの 7 月革命を一応の契機としてドイツ文学も新しい時代に入った。いきおい、文学の中にも政治性・社会性と云ったものが強く反映して来る。しかしそうであればあるほど、政治的には次々と近代化の芽が摘みとられたことに対応して、新しい文学もしっかりと結実するには至らなかった。いわば文学的にも一つの過渡期であった。

凡そこうした時代にハイネは文学生活を送った。ロマン主義の中に育ったハイネは、その一生を通じて文学と政治の間に苦しみ悩んだ。彼は新しい時代の到来を信じ、そして新しい内容と形式をもった文学の創造を目指したけれども、又一方では、自分は過渡的な存在であることを自認していた。彼の生涯を通じての言動には多くの矛盾が指摘されるし、従って、ハイネの総合的な評価は決して容易なことではない。

私はここで、ハイネの最初の散文集である《旅の絵》について、その主題を探りながらハイネの進歩的な面を素描して見たいのである。この作品の性格上、当然ながら

当時の史的背景を大観することによって書き始めようと思う。

(1)

1806年のイエーナの会戦は、遂にプロイセンの敗北するところとなり、ここに飽くことなき専制を続けて来たドイツ諸領邦にも、爽やかな自由・平等の朝風が吹き込んで来た。すでに名あって実なきドイツ帝国即ち神聖ローマ帝国は崩壊し、そしてバイエルン及びヴェルテンベルク両王国、バーデンとヘッセン＝ダルムシュタット及びベルクの三大公国、マインツ大司教国、その他つの小侯国による、いわゆるライン同盟が出現した。これより先、1803年にすでにナポレオンはドイツの改革を実行し、当時いまだに300以上の領邦に割拠していたドイツは、それによって一度に100以下に激減することになった。そして1807年には、イエーナ会戦で敗れたプロイセンは、旧ポーランド領にワルソー公国、それにエルベとラインの両河の間にヴェストファーレンの二つに分断されるに至り、殆んど無力化してしまった。しかしこのようなナポレオンのドイツへの痛棒によって、ドイツ民族は長い間あがきのとれないまでにおちこんだ根強い封建的泥沼を抜け出て、目覚しく近代的に発展しつつあった西ヨーロッパの文明国の中に仲間入りすることになった。

先にナポレオンによって作られたワルソー公国及びヴェストファーレンの両国は、直に近代的、ブルジョアの改革が施され、旧来の封建制度と農奴制が廃止され、法の前における市民の平等が実施され、いわゆるナポレオン法典の原理が採用された。ハイネの生れた、そして少年時代を送ったデュッセルドルフはその中の一都市であり、まだ10才足らずのハイネがすでに自由と平等の精神の中に浸って育ったと云うことは、ハイネの作品理解にとって重要なことである。《旅の絵》の第2巻の後半に入っている《観想ル・グランの書》には、言葉の精神を学ぶには太鼓の音によるのが最もよい、と語っているハイネが、いかにフランス軍の鼓手ル・グランの太鼓の打出すいろいろな曲によって、自由とか平等と云う言葉を知り、それらの精神を身につけたかがはっきり表明されている。

„…… — doch konnte er sich auf der Trommel sehr gut verständlich machen, z. B. wenn ich nicht wußte, was das Wort "liberté" bedeute, so trommelte er den Marseiller Marsch — und ich verstand ihn. Wußte ich nicht die Bedeutung des Wortes „égalité," so trommelte er den Marsch „ça ira, ça ira — — les aristocrates à la lanterne!" und ich verstand

ihn.“

そしてこれらをもたらししたナポレオンを、その意味でどんなに崇拜したかがつぶさに語られている。このような地方では勿論ユダヤ人への差別待遇は何ら行われなかった。

しかし、こうしたナポレオンによるブルジョア的改革も、未だに封建的迷夢の覚めやらないドイツにあっては、画期的な成果を収めるには至らなかった。真に不完全そのものにならざるを得なかった。例えばプロイセンの農民に対する土地所有権についての約束などにしても、結局はプロイセン自身のフランスに対する戦争のために農民の離脱を防ぎ、その協力を求めんがための何ものでもなかった。あくまでも自分から目覚め得なかったドイツ、しかも外部からいくら揺動かしても、なお近代的発展をし得なかったドイツ。フランス革命及びすでに始っていた英国産業革命によって、世界的には政治・経済・社会・科学等が一大飛躍を遂げつつあった中で、このような現状を続けるドイツは、発展が益々遅れなければならなかった。すでに 1618 年から 48 年までのいわゆる 30 年戦争によって、世界の舞台から退場していなければならなかったドイツであったのである。

なるほど、英国の産業革命の影響も少しずつにしてもドイツにも及ぼしたとは云うものの、長い間の手工業つまりツunft制度に根強い伝統を持ち、更にナポレオンの改革によるも、なお 100 に近い諸領邦に分れ、それらの間のまちまちな経済組織、それによる錯雑極まりない利害関係などによって、ドイツの経済的發展は思うように行かなかった。それに加えて、貴族や僧侶の腐敗は横暴を極め、彼等は貨幣を得るためには手段を選ばなかった。諸侯の人身売買、教会の貨幣による万事の解決等。ハイネは《旅の絵》の最初を飾る《ハールツ紀行》の中で貨幣鑄造所を見物する所に次のように書いている。

„Mit einem Gefühle, worin gar komisch Ehrfurcht und Rührung gemischt waren, betrachtete ich die neugeborenen blanken Taler, nahm einen, der eben vom Prägstocke kam, in die Hand, und sprach zu ihm : jungen Taler ! welche Schicksale erwarten dich ! wieviel Gutes und wieviel Böses wirst du stiften ! wie wirst du das Laster beschützen und die Tugend blicken, wie wirst du geliebt und dann wieder verwünscht werden ! wie wirst du schwelgen, kuppeln, lügen und morden helfen !“

この文章が必ずしもそうした諸侯や教会へ向けられていないにせよ、とにかく当時の社会に対するハイネの態度が見られて興味のある所である。

かくの如き政治的にも経済的にも立ち遅れたドイツに、やっと近代的精神を吹込んだナポレオンも、1814年から15年にかけてのいわゆる解放戦争によって失脚するに至り、彼の軍事的独裁を押払ったドイツの民衆は、漸くにして得た自由をも一緒に払いのける結果になってしまった。約束であったドイツの統一国家も、農民への土地権利も一切はプロイセンの封建的ユンカーどもの好餌に過ぎなかった。結果から見れば、民衆は解放戦争によって諸王侯の旧来への復活再建のために犠牲になったのであった。フランスではブルボン王朝が復活した。ドイツにおいても、プロイセンは再び元の領土を合せて権力を盛返した。そして、さすがに新興ブルジョアジーはそれらの旧態通りの復活は許さなかったとは云え、再び1815年以後の暗黒の大反動時代に入らねばならなかった。ハイネが自由の空気を吸続けた所のデュッセルドルフを含むライン地方も、再びプロイセンの絶対王政の下に置かれることになった。

たとえ軍事的独裁とは云え、ナポレオンはフランス革命の子であったと云うことが、彼をして他の独裁者と区別し得る重要な要素である。ハイネはナポレオンに非常に熱狂したことが、《観想ル・グランの書》の中につぶさに見られることは前に述べたが、その外の所でもナポレオンを賛美した文章が少からず見受けられる。こうしたハイネのナポレオンへの態度は当時のドイツ更にはヨーロッパの実状を広い視野を持って視、加えてハイネが生涯を賭した仕事は何であったかを知ったならば、容易に理解出来ることである。勿論ここでは、あのル・グランの力に大いにあずかる所があることは当然である。彼から自由や平等と云う言葉を実感を持って身につけた外にも、その上ナポレオン戦をつぶさに聞いた。まだ少年であったハイネにとって、そして又ドン・キホーテを最初に愛読したハイネにとって、そうした物語は彼を感激させずにはおかなかったのであろう。しかしそうした感激を充した《観想ル・グランの書》なる作品を1826年に書き、《旅の絵》の第2巻として入れたことは、ハイネがナポレオンに何を見、ナポレオンのどこに感激し、共鳴したのであったかを端的に示していると云えよう。《観想ル・グランの書》と共に《旅の絵》の第2巻をなす《北海》は同じ年のそれよりも少し前に書かれたものであるが、この中で次のように書いている。

„……von dem Napoleon, dem neuen Manne, dem Manne der neuen Zeit, dem Manne, worin diese neue Zeit so leuchtend sich abspiegelt, daß wir dadurch fast geblendet werden und unterdessen nimmermehr denken an die verschollene Vergangenheit und ihre verblichenen Pracht.“
新しい時代の新しい芸術を予言し、造り出したハイネは、正しくも新しい時代の新

しい人間をナポレオンの中に見たのである。

さて、こうしたナポレオンも 1815 年には完全に史上から抹殺され、その代りとして旧い時代の封建的貴族が返り咲くことになった。実際ドイツはこの後、1830 年及び 1848 年の 2 回のブルジョア革命にも失敗に終り、やがて 1871 年のプロイセンによる統一ドイツ帝国に向わねばならなかったのである。そしてドイツの市民文学もこれに対応して行かなければならなかった。そうしたドイツの市民文学の発展の最後を荷うものとして、ハイネは苦難の道を歩むことになる。1815 年の歴史的諸事実は、全くこうした将来を生み出す重大な意義を含んでいる。この大反動時代がなく、プロイセンもかくの如き形では復活せず、ライン地方は、そしてドイツが、ナポレオンによって与えられた自由と平等の精神をもとにして、ブルジョア的形態をもって近代史に名を連ねて行ったとしたら、現在見られる如きハイネの《旅の絵》の諸作品は存在しないか、或は大きく内容が変っていたであろう。私がこんな愚にもつかない妄想をなすのも、《旅の絵》がいかにドイツの現状と密接な関係をもっているか、云わばこの作品は時代の産物であり、社会の産み出したものであることを力説したいがために外ならない。

そうした作品を生出した 1815 年以降の大反動時代の状態はどのようであったろうか。1814 年から 15 年にかけてのヴィーン会議によって、プロイセンは旧領土を復活することになったが、解放戦争における公約であり、民衆の等しく要望していたところの統一ドイツ国家は出現せず、それとは遠く隔った《ドイツ連邦》と云う変形なものが出来た。すでに市民階級が生れた歴史的現実に影響を受けて、諸王侯の数は 30 余りとはなったが、これらの諸王侯は依然として夫々実質的に独立した国家を形成し、それらの間における経済的利害関係の統一と云ったような組織は何らなされなかった。又、フランクフルト・アム・マインに設置された《ドイツ連邦議会》も、これとて統一ドイツとしての行政上の仕事を行うのではなく、ドイツ民族の自由と統一との声を圧殺するための封建的諸王侯の民衆弾圧機関として、云わば諸領邦の共同獄吏としての任務を遂行したに過ぎなかった。更に 1815 年にかの《神聖同盟》が作られた。そしてオーストリアの大反動宰相メッテルニヒが、ドイツの頭上にのさばって来ることになった。彼は一切の自由主義的民主主義運動は勿論のこと、そのような運動の兆候すらも徹底的に弾圧したのである。

ハイネはこの年に、《連邦議会》の設置されたフランクフルト・アム・マインに銀行家や商人の見習いに行ったが、ここで彼は初めてユダヤ人のいわゆる《ゲッター》を見て激しい怒りを覚え、人間の平等・解放の精神に燃えたのである。

この後彼はハンプルクの叔父ザロモンの所でやはり同じような見習いをするが、この1816年から19年までのハンプルクにおける生活で、従妹アマーリエに対する恋をする。しかし、後のその妹テレゼにおけると同様、ハイネには悲しい結果をもたらすに至ったと云うことは革命の書たる《旅の絵》にも少からず影響している。特に最初の作品《ハールツ紀行》には多分にこのことが見られるのである。しかし恋に悩み、恋にのみ生きるだけでは済まされない現実、そうしたドイツの現実を鋭く洞察し、これを認識することによって自己に与えられた歴史的使命は、封建的みじめさにあえぐ《人類解放》たることを悟り、敢然としてその中に身を委ね、やがて《旅の絵》なる特異な散文的作品を真に《ハイネ的》文体によってものにするに至ったのである。

さて、ドイツの頭上に強くのしかかった大反動ではあったが、やはり時代は成長して居り、早くも1817年には《大学生組合》^{ブルシェンシャフト}によって反抗の火蓋が切られた。1819年10月のライプツィヒ戦勝記念祭のデモンストレーションでは、この年にボン大学に入ったハイネも加わって、当局により厳しい取調べを受けている。こうした一連の自由主義的な運動に対して、メッテルニヒはいよいよ弾圧を加えるに至った。即ち1819年のカルルスバートの会議における決議がそれである。これによって《大学生組合》は禁止され、大学の進歩的教授は追放され、一切の出版物に対しては事前検閲がなされることになった。メッテルニヒはいよいよドイツにおける権力を増し、《連邦議会》は彼の支配下に収めるに至った。ドイツの貧困さは益々その度を増して行った。

このようなドイツの状態に対して、当時の世界史的動きはどうであつたろうか。まず、ヨーロッパの反動に対する抗争は遠く離れた南アメリカの植民地における独立闘争によって、すでに1810年以来始められていた。こうした独立闘争をもメッテルニヒは弾圧しようとした。この結果、1823年にいわゆるモンロー主義の宣言がなされた。これによってヨーロッパの強力な反動協調は、最初の強い打撃を受けたのである。一方、ヨーロッパの諸民族も1820年代に入ると独立闘争を始める、即ちスペインのリエゴ将軍の反乱及びイタリアのカルボナリ党の蜂起などである。がしかし、これらはかの神聖同盟によって圧殺されてしまった。しかしトルコに対するギリシャ民族の独立戦争は、これに対する西ヨーロッパ民族の強力な応援により、メッテルニヒとてこれを弾圧することが出来なかった。それどころか、英国、フランス、ロシアの三国政府はギリシャを助けてトルコに対して戦端を開くに至り、ギリシャは遂に7月革命を前にして独立することになった。これはメッテルニヒ指導下の反動勢力にとって第2の大きな打撃となった。

この間における1824年に、ギリシャの独立戦争でバイロンが客死したことは、ハ

イネにとっては重要である。《旅の絵》において少なからず彼バイロンを論じている。ハイネはバイロンについてはすでに早くから彼の作品を読み、彼に傾倒していた。そうしたバイロンの死にハイネがいかに感激したかは、その年の6月25日の親友M. モーザー宛の手紙によく現われている。

„— Der Todesfall Byrons hat mich übrigens sehr bewegt. Es war der einzige Mensch, mit dem ich mich verwandt fühlte, und wir mögen uns wohl in manchen Dingen geglichen haben; scherze nur darüber so viel Du willst. Ich las ihn selten seit einigen Jahren; man geht lieber um mit Menschen, deren Charakter von dem unsrigen verschieden ist. Ich bin aber mit Byron immer behaglich umgegangen wie mit einem völlig gleichen Spießkameraden. Mit Shakespeare kann ich gar nicht behaglich umgehen, ich fühle nur zu sehr, daß ich nicht seines Gleichen bin, er ist der allgewaltige Minister, und ich ein bloßer Hofrath, und es ist mir, als ob er mich jedem Augenblick absetzen könnte.“

とにかくバイロンの中に自分に最も似た姿を見たハイネは、それ故に又自分をそして自分の行動をバイロンのそれと常に比較していたようである。《北海》の中にも次のような文章が見られる。

„Wahrlich, in diesem Augenblicke fühle ich sehr lebhaft, daß ich kein Nachbeter oder, besser gesagt Nachfrevler Byrons bin, mein Blut ist nicht so spleenisch schwarz, meine Bitterkeit kommt nur aus den Galläpfeln meiner Tinte, und mein Geist in mir ist, so ist es doch nur Gegengift, Gegengift wider jene Schlangen, die im Schutte der alten Dome und Burgen so bedrohlich lauern. Von allen großen Schriftstellern ist Byron just derjenige, dessen Lektüre mich an unleidlichste berührt; ...“

このようなバイロン批評をすればするほど、やはりハイネは益々バイロンのようになるを得なかったことが端的に知られるところである。

バイロンの客死は1824年4月であったが、この年の末には、《旅の絵》の第1巻の《ハールツ紀行》が書かれたことからしても、そして上述のような友人モーゼス・モーザー宛の手紙にも見られる如く、《旅の絵》は多分にバイロンの性格によって書かれていると見て間違いのないであろう。後で示すところであるが、バイロンはギリシャの独立のための戦争で客死したこと、そしてハイネのこの《旅の絵》はやがて来るべき新しい革命、そしてそれによって自由な近代的ドイツの建設されるべき、そうした

革命に希望を持ち、大胆に世に出されたと云うことを考えるならば、バイロンの死によって、ハイネは大いに啓発されるところがあったと云えるのではないと思われる。

眼を転じて当時のロシヤを見る時、長い間専制主義の氷雪に閉されていたこの国においても、ナポレオン戦争において、青年士官がフランスにおいて革命によって解放された人民の生活を見るに及び、やがて自国の農奴制と専制政治に反対し、人民の権利と憲法とを要求し始め、1825年にはいわゆるデカブリスの蜂起を見るに至った。

更には先に隣国により無惨な分割をされたポーランドの独立運動や、こうした自由主義的な動きと対蹠的に、宗教にあっては当時の法王ピオ7世がプロテスタントを迫害する等、この頃における世界史的動向である。暗黒の世界と云えども、そろそろ1820年代になって暁の光が差してくる気配が見えて来たと云うことは、実にこの《旅の絵》に重要な関連を持っているのである。

ここで最後に再びドイツに眼を向けて見る時、大反動の主宰者メッテルニヒのお膝下として、オーストリアと共にまだまだ反動の夜は深く閉されていた。彼の操縦するハプスブルク王朝の専制政治をば、その支配する大小諸侯を互にけしかけることによって、その勢力を維持し、ドイツの一切の自由主義的運動を弾圧していた。そしてこの政策を助けたのは、かのプロイセンのホーエンツォレルン王家の専制政治であった。プロイセンのユンカー共は、依然として旧来の封建的絶対主義から脱し得なかった。こうした貴族の横暴をば、ハイネは第2巻の《北海》において、ハノーフェルの貴族を中心に毒舌をもって嘲笑している。即ち、

„Die allgemeine Klage über hannövischen Adelstolz trifft wohl zumeist die liebe Jugend gewissen Familien, die das Land Hannover regieren oder mittelbar zu regieren glauben. Aber auch die edlen Jünglinge würden bald jene Fehler der Art, oder, besser gesagt, jene Unart ablegen, wenn sie ebenfalls etwas in der Welt herumgedrängt würden oder eine bessere Erziehung des jungen hannörischen Adels ließe sich vielen Klagen vorbeugen. Aber die Jungen werden wie die Alten. Derselbe Wahn: als wären sie die Blumen der Welt, während wir andern bloß das Gras sind; dieselbe Jorheit: mit der Verdienste der Ahnen den eigenen Unwert bedecken zu wollen; dieselbe Unwissenheit über das Problematische dieser Verdienste, indem die wenigsten bedenken, daß die Fürsten selten ihre treuesten und tugendhaftesten Diener, aber sehr oft den Kuppeler, den Schmeichler und dergleichen Lieblingsschufte mit adelnder Huld beehrt haben.“

かくて、こうしたドイツにおける大反動も 1830 年のパリの 7 月革命によって一時にしろ中断されるに至る。間接的にこの革命への気運を助長して来たところの、上述した如き世界史の情勢の発展に対応して、ハイネの一連の《旅の絵》が真の文学作品として世に出されたと云うことは、当時のドイツ文学の世界においても画期的な進路をきりひらいたものであったことと同時に、近代社会の発展にとって真に意義深いと云わなければならない。

さて今、私は《旅の絵》が当時のドイツ文学の世界にあって画期的な進路をきりひらいたものであると云った。このことは当時のドイツ文学の主流をなした《ドイツロマン主義》を分析することによって明かになるであろう。そして、いかにハイネが反動的ドイツロマン主義を乗り越えて、新しい文体により、新しい文学を作り出したかを見るであろう。

(2)

私の以下に論述するところは、ドイツロマン主義が上述のような世界史の発展の中にある、どのような状態を呈していたか、そしてその結果は 1815 年以降の大反動化していく歴史的情勢に、いかなる態度をとって行ったかと言うことである。しかし、このようなロマン主義の経路及び状態の正当な評価をなし得るためには、やはりロマン主義の起りと本質についての定義を持って論を起さなければならない。そしてこれをもとにすることによって、《旅の絵》が現われる当時のロマン主義の状態と性格が、いかなるものであったかが知られるであろう。

《反動》と言う言葉の意味するところは、ただそれだけでは単一なものではないが、ドイツロマン主義も、前時代に対する反動として生れた。その主なる対象が、G・ルカーチの云うように、明確にフランス大革命であるかははっきり決定し得ないが、影響を受けていることは確かであろう。しかし、ドイツ啓蒙主義及び古典主義に対する反動であったことは間違いのないところである。

さて、《反動》と云うことであるが、G・ブランデスによると、

「反動そのものは退歩と全く同意義ではない。それどころか、真の補修かつ匡正する反動は進歩である。然しかかる反動は、強烈であり、短期間のものであり、かつ停滞しない」

と述べているが、まさしく反動の起る動機は多分にこうした意味を含むであろう。しかしブランデスも云うように、これが必要以上に長い期間にわたる時、それは停滞し、

退歩と同意義にならざるを得ないであろう。

われわれにとって重要なドイツロマン主義は、その発生の動機は他国のそれと相似するも、その土台になった当時の政治的・経済的・社会的基盤が、他国のそれと比べて非常に違っていたと云うことは重要なことである。こうした近代的に未発達な——勿論弱いものではあれ、ブルジョア的なものではあるが——社会的基盤の上に立ったことによって、ドイツロマン主義は必要以上に長い間、ドイツ文学の主潮として安泰することになってしまった。その結果、初期の意義はどこへやら、全く停滞・退歩の末路をたどるに至った。こうした状態の反動化はG・ルカーチの定義が明析である。即ち、その《ドイツ文学小史》の中で、ドイツ文学があくまでドイツ民族の運命の一部、一因子、一つの表規、一つの反映であるとの前提の上に立って、次のように定義づけている。

「進歩的とはドイツの貧困との戦いであるし、この貧困を何らかの仕方で永遠化しようとするすべての努力を、われわれは反動的と名附ける。」

歴史の発展の見地に立って、その過程の中に生れた文学を歴史の進歩に結びつけて評価しようとする時、少なくともドイツロマン主義は総体的に見て、ルカーチの云うような反動的と云える性格を持っていると思われる。

かくの如き反動的要素を強くしていったドイツロマン主義に対してブランドスは次のように云っている。

「全体として観察すれば、ドイツロマン派は反動である。然しそれにも拘わらず、精神的反動、詩的哲学的反動としての同派は、新しき発展の多くの萌芽を有し、かつ『新』を創造して絶えず眼界を拡張する進歩的精神の明白に認められる製作物を持っている。」

と説き起し、そのいろいろな具体的な例証をあげた後、次のように云っている。

「惜しいかな、これらの立派なる目的に対する彼等の追求は悲しむべき結果に終わった。」

ドイツロマン主義は前にも述べたように、次第に貧困なドイツの社会的な機構にびったりとはまり込んでいくに至り、長い間これと調和して、ドイツの近代国家の成立を妨げる役割を演じてしまった。そして1815年のヴィーン会議を主導し、その会議の思想の自由を撤回すべき宣言書を起草するまでに、全く反動化していく。思想の自由を始め、当時の政治的権力に同調した枠内に入りこみ、それに反する一切の自由をば放擲したドイツロマン主義からは、一体いかなる文学が生れ得ようか。ハイネはこうしたロマン主義の中において育ち、その文学を読み詩作を始めた。1819年には最初

に入学したボン大学において、ロマン派の巨匠 A.W. シュレーゲルに傾倒した。こうした時期のハイネの詩作品は、ロマン的な香りの充ちたものであることは明白である。がしかし、次第に彼独自の新しい形式と内容を持った文学作品を生出すようになる。

ここで大切なことは、ドイツロマン主義から抜け出することは直ちに純粋な意味における《ロマン的》形式から脱することではないと云うことである。ハイネにあってはロマン的な要素が多分に入っている。しかしそれらはその作品の本質ではなく、内容的には完全にドイツロマン主義を超えた作品であることは明白である。

さて、ドイツロマン主義についてのブランデスの言葉を再び次に引用することによって、その本質を伺い知るであろう。

「而してロマン主義には当初から、その発展経路を曲線に強いたる反動的原理がかくされていたことを理解すべきである。……われらはロマン主義の末路が婉然たる妖魔の安息日であることを感じないわけには行かない。このもの狂おしき祝日において、哲学は正に老妖婆の役目を演じ、その周囲には非開化主義者や神秘家の叫喚が雷鳴の如くに鳴り渡り、警察国家、僧侶崇拜及び神政を主張する政治家の絶叫がひびいている。而して科学は神学や神智学に慰撫されつつ声を潜めているのである。」

ハイネの接したのはまさにかかるロマン主義であり、そこでは最早真の文学は死滅した状態に外ならなかった。

こうした歴史的情勢の中に、かくも死滅したドイツ文学の世界に突如として新風を吹き込んだ《旅の絵》を、これまでに述べて来たことをもとにして見て行くことにする。

(3)

《旅の絵》の最初の《ハールツ紀行》が書かれたのは、公刊の2年前になる1824年の10月から11月においてである。1821年に決闘したことにより停学処分を受け、ゲッティンゲン大学からベルリン大学に移り、そこでかのヘーゲルの講義を聴き、ロマン主義の文学者とも沢山交わり、その他多くの生涯の知己を得たハイネは、1824年4月再びゲッティンゲン大学に入学した。そしてこの年の初秋にハールツ地方の旅をし、帰途ワイマールにゲーテを訪ねたりして帰り、一気呵成に《ハールツ紀行》を書き上げたのである。もっともこれが1826年に、《旅の絵》の第1巻として公刊されるまで

には再三手が加えられたようであるが、ここではそのことには触れない。

《旅の絵》のすべり出しはこのようにして出来上った。当然のように、この第1巻をもってすでに公然と、ハイネは当時ドイツにおいて益々重苦しくなっていく俗物への果敢な攻撃・嘲笑をもって、反動化した社会にいどんでいる。表面的な鋭さは第2巻以後の作品に比して少ないが、すでに《旅の絵》の方向を決定的にしている点で、この《ハールツ紀行》は全体の序論であり、目録と云えるものである。その自然描写は実に美しいものであるが、しかし、ハイネはそれだけに止まってはいない、絶えずそこから現実の問題に発展して行く。

こうした最初の《ハールツ紀行》からして、それまでの単なる旅行記と云ったようなものではなかった。勿論、第2巻以後は益々そうした傾向を大にする。第2巻の《観想ル・グランの書》などは表題からして全然旅行記などではない。しかしこうしたもののまでが含まれ得ると云う事実が、《旅の絵》の何たるかを端的に表明しているものである。

ハイネはすでに述べたように、ロマン主義の中に文学的成長を続けて来たが、しかしすでに1820年に書いた文学評論の試作《ロマン主義》において、ドイツロマン主義の本質を見てとっている。そして新しい、ありきたりのものではない文体の作品を書こうと考えていたらしい。そうした考えによって書かれたのが、実にこの《ハールツ紀行》であったと云える。このことについては、ハイネがこの作品を書いている最中の1824年の10月30日付の、親友Mモーザー宛の手紙の中に次のような文章が見られる。

”Ich habe jetzt meine, Harzreise‘ schon zur Hälfte geschrieben und will nicht abbrechen. Diese schriebe ich in einem lebendigen, enthousiastischen Styl, und es würde mir nicht allein nach einer Unterbrechung schwer werden, wieder hineinzugrathen, sondern auch würde es mir schwer fallen, aus diesem Styl in die trockne gelehrten Anzeige-Prosa überzugehen.“

このようなハイネの考えが後年の新しい時代の新しい芸術と云う理念に、発展して行っただと見ていいだろう。即ち、1828年に書いた《W. メンツェルのドイツ文学》の中で、ハイネは次のように記している。

”Das Prinzip der Goetheschen Zeit, die Kunstidee, entweicht, eine neue Zeit mit einem neuen Prinzip steigt auf, und ……”

1828年と云えば、《旅の絵》の第2巻が出た翌年であり、ハイネはこれを書いた後

イタリアへ旅立っている。更にこうした考えが、1830年、ハンブルクから K.A. ファルンハーゲン・フォン・エンゼに宛てた手紙には次のように書かれている。そこでは、《芸術時代の終り》なる言葉を用いて、

„Es ist noch immer meine fixe Idee, daß mit der Endschaft der Kunstperiode auch Goethenthum zu Ende geht ;“

そしてこのようなハイネの考えが1830年の7月革命が勃発すると共に、1831年5月勇躍ライン河を渡って後、10月に完成した《フランスの画家達》において集大成されている。即ち、

„Meine alte Prophezeiung von dem Ende der Kunstperiode, die bei der Wiege Goethes auffing und bei seinem Sarge aufhören wird, scheint ihrer Erfüllung nahe zu sein. Die jetzige Kunst muß zugrunde gehen, weil ihr Prinzip noch im abgelebten, alten Regime, in der heiligen römischen Reichsvergangenheit wurzelt. Deshalb, wie alle welken Überreste dieser Vergangenheit, steht sie im unerquicklichsten Widerspruch mit der Gegenwart. Dieser Widerspruch und nicht die Zeitbewegung selbst ist der Kunst sehr schädlich ; im Gegenteil, diese Zeitbewegung müßte ihr sogar bedenklich werden,“

Indessen, die neue Zeit wird auch eine neue Kunst gebären,“

ここにおけるハイネの見解は、そのまま《旅の絵》にも当はまることだろう。ハイネが新しい時代における新しい芸術と云うことを早くから提唱して来たことは、上の引用からも明確であろう。このような文学的理念の下に、一連の《旅の絵》の作品が書かれて来たと見る事が出来る。「今までの芸術の原理は現代と最も不愉快な矛盾を生じている。そして芸術にとって真に有害なのは、この矛盾であって時代の動きではない。それとは反対に時代の動きは芸術にとって有利にさえなるはずである」と云う言葉ほど、《旅の絵》を書いて来た当時の、ハイネの意向を端的に示しているものはない、と同時に、逆に云うならば、これによって《旅の絵》の本質に触れることが出来よう。この作品の表現形式は主観性の強い、情熱的な、そして鋭い皮肉と嘲笑を含んだものだが、ハイネはこのような表現形式を新しい技法への過渡的なものであると自ら規定している。即ち、先に引用した《フランスの画家達》の中で、新しい芸術は新しい表現形式を創造して行くであろう、と述べながら引き続き次のように書いている。

„Bis dahin möge, mit Farben und Klängen, die selbsttrunkenste Sub-

jektivität, die weltentzügelte Individualität, die gottfreie Persönlichkeit mit all ihrer Lebenslust sich geltend machen, was doch immer ersprieblicher ist als das tote Scheinwesen der alten Kunst.“

ハイネが《旅の絵》をもって、先駆的にドイツ文学の世界に新風を送り込んだとしても、決して言い過ぎにはならないだろう。とにかく《旅の絵》の文体は、真にハイネの個性によって作り出された、つまり《ハイネ的》なものであり、当時のドイツの社会的状況において生れ得る最高の表現形式であったと云えよう。ハイネのこのような点について、G. ルカーチは《国民詩人としてのハイネ》の中で正しくも次のように云っている。

„Wenn Heine eine gestaltete Kritik der deutschen Zustände auf der internationalen Höhe der Epoche, also wirklich zeitgenössisch und nicht deutsch-anachronistisch, gegen wollte, so war es für ihn unmöglich, auf deutschem Boden bei realistischer Gestaltung der deutschen Verhältnisse eine Handlung zu finden, die diese Kritik adäquat und realistisch sinnfällig machen konnte. Es ist also weder eine dichterische Schwäche noch eine persönliche Schrulle Heines, wenn er für seine großen dichterischen Kritiken Deutschlands, für „Atta Troll und „Deutschland, ein Wintermärchen“, die entsprechend abgewandelte lyrisch-ironische, phantastisch-ironische, extrem subjektivistische Form der dichterischen „Reisebilder“ wählte. Er wählte die damals einzig mögliche *deutsche Form* des höchsten dichterischen Ausdrucks der gesellschaftlichen Widersprüche.“

さて、このようなハイネの偉大な試みによって彼は鮮かにドイツロマン主義を抜け出た。そして何としても、ドイツの現状に鋭い批判の矢を放たずにはいられない、みじめなドイツの民衆を救わなければならない、このような自覚のもとに、次々と作品を書いて行ったのに違いない。希望をもって、熱をもって、大胆に、自信満々に自己の考えを吐露している。そしてすでに触れたように第1巻において、むさくしく充満した俗物への攻撃から始めたのであったが、G. ルカーチはこの俗物について、《ドイツ文学小史》の中で、

「一体この俗物なるものはドイツ文学発展の最も大きな制限となった一つであった。凡そ19C. 初期におけるドイツ専制君主位、けちくさい、知性のないものはどこにもなかったと共に、かれらの暴逆に対するこれほど微弱な抵抗も、史上どこにもなかった。」

又別のところでは、

「そこでドイツ啓蒙主義も古典主義も又ドイツの俗物に対して闘争した。しかしこれらの闘争、つまりドイツの覚醒と人間の教育と云う闘争の有機的一部分にすぎなかった。……ロマン主義的イロニーのうちにドイツの俗物的精神に対する闘争の歪曲が生じた。それはロマン主義的イロニーのうちに、不幸な、より高度の狭隘化が生じたことによる。かくて大きな政治的・社会的な文化問題は、狭い小さなサークル的教養の問題、それどころか、美的秘密礼拝集会の問題に縮まってしまう。……平凡な俗物にたいするロマン主義の闘争は、常軌を逸した俗物を生む。」

ルカーチの云うように、ロマン主義は益々俗物を生む結果となり、今や息づまるほどそれが充満する状態になった。新時代を目指し、新文学を切り開こうとしたハイネが、まずそのためには、かくも充満した俗物を払いのけることにありと見てとったことは当然推察出来る。歴史に対する洞察の鋭いハイネであったのだ。

すでに多少ふれたように、この第1巻の《ハールツ紀行》は、本式に《旅の絵》の第1巻として世に出るまではやや長くかかった。いわばこの難産は、こうした初産に適わしかつたと云った方が、より適切かも知れない。ハイネは《ハールツ紀行》の後記で次のように述べている。

„Die, Harzreise“ ist und bleibt Fragment, und die bunten Fäden, die so hübsch hineingesponnen sind, um sich im Ganzen harmonisch zu verschlingen, werden plötzlich, wie von der Schere der unerbittlichen Parze, abgeschnitten. Vielleicht verweben sie weiter in künftigen Liedern, und was jetzt kärglich verschwiegen ist, wird alsdann vollauf gesagt. Am Ende kommt es auch auf eins heraus, wann und wo man etwas ausgesprochen hat, wenn man es nur überhaupt einmal ausspricht. Mögen die einzelnen Werke immerhin Fragmente bleiben, wenn sie nur in ihrer Vereinigung ein Ganzes bilden.“

このハイネの言葉は、《ハールツ紀行》の文学的位置をはっきりと決定するであろう。問題とするところは最初から提議された。この上述の文章を念頭において《旅の絵》を読むならば、全体としての大きな思想の流れに沿って各作品が、整然たる順序で発展して行くのを見るであろう。この全体を流れる大きな思想とは何であるか。それはドイツの貧困を救わんとするハイネの、自由と解放の思想に外ならない。そしてそれは、1830年の新しい革命、7月革命に連なるものであることを見逃してはならない。G. ルカーチの言を借りるならば、これらの一連の作品は、かかる「革命へのイ

デオロギー的準備」であったのである。そしてその頂点は第3巻の《イタリア紀行》の第1部、《ミュンヘンからジュヌアへ》である。第1巻も第2巻も、その全く用意周到な踏石であったのである。第3巻の第2部以降は、その頂点から7月革命に到る延長として私は規定する。

ハイネが《ハールツ紀行》を書くに当って、次のようなL. ベルネの言葉を巻頭に載せているのは興味深い。即ち、

“Nichts ist dauernd, als der Wechsel; nichts beständig, als der Tod.
Jeder Schlag des Herzens schlägt uns eine Wunde, und das Leben wäre
ein ewiges Verbluten, wenn nicht die Dichtkunst wäre. Sie gewährt uns,
was uns die Natur versagt: eine goldene Zeit, die nicht rostet, einen
Frühling, der nicht abblüht, wolkenloses Glück und ewige Jugend.”

これから新しい文学を作り出そうとするハイネにとって、これは真にふさわしい巻頭言と云うべきである。まるで死と化した現実の社会を抜け出し、自由な新鮮な風に吹かれんがために、ハイネはハールツ山に登る。最初に掲げてある次の詩は、《旅の絵》全巻への出発に何とびったりしていることであろうか。即ち、

Auf die Berge will ich steigen,
Wo die frommen Hütten stehen,
Wo die Brust sich frei erschließt
Und die freien Lüfte wehen.

Auf die Berge will ich steigen,
Wo die dunkeln Tannen ragen,
Bäche rauschen, Vögel singen
Und die stolzen Wolken jagen.

Lebet wohl, ihr glatten Säle,
Glatte Herrn! Glatte Frauen!
Auf die Berge will ich steigen,
Lachend auf euch niederschaeen.

勿論こうした社会へのハイネの態度は、従妹アマーリエとの恋の破綻、加えてその妹テレゼに対する恋もかんばしくないこと、及び大学を卒業する、翌年の6月に心ならずも、生活して行かんがためにプロテスタントとしての洗礼を受けることなどに

対する、ハイネの内的な悩みも当然影響している。

ドイツの現実に対してかかる態度をとったハイネは、当時の社会情勢を巧みにパレリーナの動作に云い表わして諷刺している文章は、《ハールツ紀行》の圧巻とも云うべきであろう。

ハイネが1815年に銀行家や商人の見習としてフランクフルトに行った時、そこで初めてゲッターを見て、人間の不平等に強い怒りを覚えたことは前にも述べたが、後年1821年にベルリン大学に入りその翌年には、その《ユダヤ人文化学術協会》に加わり、いろいろ活躍している。1824年にはユダヤ人問題を取り扱った断片的小説《パッヘラッハの師》の第1章を書き上げている。しかしこうしたハイネの解放の思想がユダヤ人問題から端を発したとは云え、ハイネの目指すところはもっと大きく全人類の解放であった。《旅の絵》の第2巻において、当時の貴族、教会従って僧侶、政治や社会について痛烈な批判を加えるに至ったために当局の検閲を通らず、ハノーフェル、プロイセン、オーストリアなどでは発禁となったほどである。ハイネは1827年4月にこの第2巻公刊と同時に英国に渡ったが、そこからの友人宛の手紙には、第2巻を書いたハイネの態度がいかに烈しい情熱に燃えていたかが伺い知れる。例えば、この年の5月1日に、ロンドンからK. A. ファルンハーゲン・フォン・エンゼに宛てて次のように書いている。

„Es war aber nothwendig, daß es geschrieben wurde. In dieser seichten, servilen Zeit mußte etwas geschehen. Ich habe das Meinige gethan und beschäme jene hartherzigen Freunde, die einst so viel thun wollten und jetzt schweigen.“

いかにこの作品がハイネ一個人の作品というより、時代の生み出した、社会全体の生み出した貴重な作品であるかが明白であろう。更に6月9日にやはりロンドンからM. モーザーに宛てた手紙の中で次のように云っている。

„Ich habe durch dieses Buch einen ungeheuren Anhang und Popularität in Deutschland gewonnen; wenn ich gesund werde, kann ich jetzt viel thun; ich habe jetzt eine weitschallende Stimme. Du sollst sie noch oft hören, donnernd gegen Gedankenschergen und Unterdrücker heiligster Rechte.“

「今度は多くのことがなし得る」とは、何と大胆なハイネの心であっただろうか。この彼の言は見事に実行された。1828年にイタリアに旅をしたことをもとにして書かれた《ミュンヘンからジェヌアへ》の中で、

„Was ist aber diese große Aufgabe unserer Zeit?“

と自問した後で彼は云っている。

„Es ist die Emanzipation. Nicht bloß die der Irländer, Griechen, Frankfurter Juden, westindischen Schwarzen und der gleichen gedrückten Volkes, sondern es ist die Emanzipation der ganzen Welt, absonderlich Europas, das mündig geworden ist und sich jetzt losreißt von dem eisernen Gängelbande der Bevorrechteten, der Aristokratie.“

遂に《旅の絵》をもってするハイネの社会への態度を大胆に表明するに至った。万人平等の思想、それは実にハイネの時代に限らない、人間社会に常につきまとう課題であるのだ。更にハイネはその後で、余りにも熱烈な態度で自分はその解放の一闘士であると宣言するのである。即ち、

„Ich weiß wirklich nicht, ob ich es verdiene, daß man mir einst mit einem Lorbeerkranze den Sarg verziere. Die Poesie, wie sehr ich sie auch liebte, war mir immer nur heiliges Spielzeug oder geweihtes Mittel für himmlische Zwecke. Ich habe nie großen Wert gelegt auf Dichterruhm, und ob man meine Lieder preiset oder tadelt, es kümmert mich wenig. Aber ein Schwert sollt ihr mir auf den Sarg legen; denn ich war ein braver Soldat im Befreiungskriege der Menschheit.“

かくて人類の解放に比べれば、愛する文学など物の数にもならないと断言してはばからない、それほどハイネは徹底した《ヒューマニスト》であったと云える。《旅の絵》におけるハイネはいかなる対象を論ずるにも、その根底にはこの自由・平等と云う人間の最も美しい精神がある。いかにしてみじめな民衆を解放出来るか、このことはハイネにとって始終まつわりついていたことだったろう。現実のドイツがいかにみじめであるか、いかにその生活が空虚で無意義なものであるかを端的に、あらゆる方面から論を進めている。1827年に書き始められた、第4巻に入る《イギリス断章》の最初にも次のように書いている。

„……Alle Kraft der Menschenbrust wird jetzt zu Freiheitsliebe, und die Freiheit ist vielleicht die Religion der neuen Zeit, und es ist wieder eine Religion, die nicht den Reichen gepredigt wurde, sondern den Armen, und sie hat ebenfalls ihre Evangelisten, ihre Martyrer und ihre Ischariots!“

ハイネはすでに新しい時代の到来を予見し、自由こそはその新時代の宗教となるだ

ろうと云い、そしてみじめさにあえぐドイツにもその新時代の来たらんことをひたすら念じたのである。

しかし、彼の限りなき情熱をもつての奮闘も空しく、ドイツの民衆は目覚めず、ドイツの暗い現状にはいつかな暁をつげる曙光の差す気配も見られなかった。ハイネは漸く戦に疲れ、1830年の2月には遂に咯血するに至り、静養することになったが、その年の6月末に静養先を北海に浮ぶヘルゴラント島に移して夏を過した。そして、がっかりして毎日沈うつな日を送っていたが、突如としてパリの7月革命の報道に接し、彼は自分の期待の実現を感じ、熱狂した。その時の模様は、島での生活をもとにした《ヘルゴラント便り》の中につぶさに見られる。そこではまさにハイネをして革命的詩人と呼ぶにふさわしい雄姿を眼前にするおもいである。ハイネは遂にドイツには住めず、翌年1831年5月ライン河を渡って、第2の故郷パリに居を移し、新たな活動に入っていくのである。

(引用文献)

Brandes, G. : *Hauptsrömungen der Literatur des 19. Jahrhunderts*, Berlin 1924.

(同書中、吹田順助訳「ドイツロマン派」, 富山房, 昭和14年)

Lukacs, G. : *Fortschritt und Reaktion in der deutschen Literatur*, Berlin 1947.

(邦訳 道家忠道・小場瀬卓三訳「ドイツ文学小史」第一部 岩波書店, 1951)

同 : *H. Heine als nationaler Dichter*,

(*Deutsche Realisten des 19. Jahrhunderts*, Berlin 1952 より)

なお、テキスト及び手紙集としては次のものを使用しました。

H. Heine. *Sämtliche Werke in zwölf Teilen*, Leipzig.

H. Heine. *Briefe*, von F. Hirth, Mainz 1950—1956.